第五階級の文学

——犬田卯の農民文学／プロレタリア文学論——

内藤由直

一　本稿の目的

本稿は、プロレタリア文学運動の擡頭期に生起した農民文学論争を再読し、論争において反マルクス主義の立場からプロレタリア文学の在り方を批判し続けた犬田卯の議論を前景化することで、当時の文学運動論に孕まれた組織の問題を検討するものである。

犬田卯は農民文学運動の黎明期より盛んに執筆活動を行い、最初の運動体である農民文芸研究会を設立し、雑誌『農民』の発行を手掛けるなど農民文学というジャンルの確立・発展に多大な功績を残した小説家・批評家・翻訳家である。しかし、日本近代文学研究の領域において犬田が研究対象として取り上げられることは稀であり、また、既存の研究における犬田への評価、特にプロレタリア文学研究者からのそれは著しく低いものとなっている。

例えば、小田切秀雄は「犬田らのグループは、（中略）移植観念的側面をもつプロレタリア文学や都会主義的な文壇文学に反撥した点では人民的な文学運動の一つとしての確かな必然性を示しながら、十分にその必要性を生かすに足るだけの思想的・文学的な強さをもつことができずに追いつめられていった」（「日本農民文学史の展望」『日本農民文学史』犬田卯著・小田切秀雄編　農山漁村文化協会　一九五八年）と述べている。そして、追いつめられた犬田たち『農民』派は、「昭和期にはいると、（中略）プロレタリア文学運動の側に、「制圧」された」（山田清三郎『近代日本農民文学史下巻』理論社　一九七六年）と考えられてきた。[1]

だが、往時を振り返るならば、そこにはプロレタリア文学運動に決して制圧されなかった農民文学者たちの存在を認め得る。本稿が焦点化する犬田卯はその一人である。さらに、犬田の議論を詳細に検討すれば、農民文学とプロレタリア文学が対立していたということも疑わざるを得ない。なぜなら、以下の論述で明らかにするように犬田が対立していたのはマルクス主義であり、プロレタリア文学ではないからだ。[2]

小田切や山田は、犬田たち『農民』派を非プロレタリア文学に分類し、そこに〝弱さ〟を見出しているが、このような論理機制には看過し得ない陥穽がある。それは、プロレタリア文学に関する狭隘な概念と絶対的な正しさ（強度）を前提とする認識の枠組みである。具体的に言えば、小田切たちの考える「プロレタリア文学」が、ナップ（全日本無産者芸術連盟／後に全日本無産者芸術団体協議会）の文学を指しているということである。小田切は「日本のプロレタリア文学運動はナップ結成後は共産主義文学運動として芸術的にも組織的にも急速に発展し、三一年秋にコップ（日本プロレタリア文学化連盟）に「発展的に解消」するまでの三年半はプロレタリア文学運動の最も高揚した時期となった」（「頽廃の根源について」『思想』一九五三年九月）と述べ、同時に「プロレタリア文学が共産主義文学にまで自己をつきつめ徹底させたことは、それ自体としては正当であ

り、歴史的な深い意義をもっている」（同前）と記している。[3] このように彼らの認識は、ナップの文学をプロレタリア文学の正統と考える機制に支えられているのである。つまり、マルクス主義を内在化し、共産主義を志向するイデオロギー純化の過程でその思想と輪廓を鮮明にしていったナップ派の文学を確固不動の「プロレタリア文学」として想定することにより、それに異議を唱えた犬田たち『農民』派との対立を演繹し、さらには犬田たちの文学がプロレタリア文学ではないものとして措定され、そこから彼らの遜色と脆弱さが帰結されるのだ。

プロレタリア文学に対するこうした限定的な定義を反復する限り、プロレタリア文学運動に内包されていた差異と多様性を看取することができない。そして、運動内の複数性に着目しなければ、「都市プロレタリアが第四階級なら、農民は正しく第五階級である。何となれば彼は現代経済組織の最後の犠牲者である」（犬田卯「農民文芸運動の現状」『農民』一九三一年三月）と述べる者の怒りが何であったのかを問うことができないのだ。

ゆえに、本稿ではプロレタリア文学の概念が指示するものを犬田たち『農民』派の運動も含めた幅広いものとして捉え、農民文学論争をプロレタリア文学運動の在り方を問うた議論の一つとして再検討する。この作業の過程において、犬田の農民文学論・プロレタリア文学論と相対化させる形で、当時のプロレタリア文学運動に備わった組織論の蹉跌を開示することが本稿の目的である。

二　共同戦線の模索と挫折

一九二二年十二月二日、東京神田の明治会館においてフランスの作家シャルル・ルイ・フィリップの十三周忌記念講演会が開かれた。夭折したフランスの農民作家を記念するこの企画は、日本における農民文学運動の原点となり、また、後のプロレタリア文学運動の在り方を左右する分岐点ともなった。

この企画の中心となったのは小牧近江である。小牧は当時、『種蒔く人』を発行するとともに日本の無産階級解放運動をいかにして全国的に組織化してゆくかということを考えていた。その時、小牧の脳裏に浮かんだのは地方主義（リージョナリズム）の概念である。小牧は、農民作家フィリップを顕彰することで地方に住む無産者の階級意識を宣揚し、その土地に根差した芸術が興隆することを期待していた。小牧は次のように述べている。

> 大衆運動の最も重要な芸術は完全なる中央集権であるべきであるが、とくに地方の芸術家にとつて、多少の自由が許されてゐると思ふ。地方の階級意識の色彩をもう少し地方的に濃厚にし、やがて、中央集権の傘下に参加するためにの（ママ）準備として、芸術上の分権は当分已むを得ぬ必要だと思ふ。僕らは手段として、芸術上のレジオナリスムに向つて当分進まなければならぬものであることを肯定する。
>
> （「地から生れる芸術の要求（三）」『東京朝日新聞』一九二二年　十月五日朝刊）

小牧は、この文章の末尾にフィリップ講演会の賛同人を得るため「ルイ・フイリツプのかくれたる愛好者は早稲田大学吉江喬松氏又は種蒔き社小生宛に御知らせを願ふ」（同前）という付記を載せた。この付記に応じて早速、友人であった平林初之輔の紹介状を貰い、吉江を訪ねていったのが犬田卯である。この時犬田は、吉江からフィリップ記念講演会の趣旨や意図を教示される。[4] そして、この二人の邂逅が、後の農民文芸研究会の結成に繋がり、日本の農民文学運動を始動させることになるのである。

しかし、農民文学運動は、右記の引用で小牧が地方を手段と規定していたように、当初より犬田のような地方出身の農民たちとは考え方の摩擦を内包しながら出発した。そして、この摩擦が強まり、越え難い溝となった結果生じたのが農民文学論争であった。

そもそも小牧は、地方に住む農民たちを鼓舞する目的で著名な農民作家を顕彰しようしたのではなかった。小牧は、「君は一体フイリツプをどう見て居るのか。彼のためには、それが例へブルジヨア芸術に対抗するための一種の主義のプロパガンダにわたることがあつてもいゝぢやないか」（小牧近江「シヤルル・ルイ・フイリツプとエミル・ギヨマン」『早稲田文学』一九二二年十二月）という問いかけに対して「何をかくさう、はじめからその腹だつたんです。社会主義者としてのルイ・フイリツプのためだつたんです」（同前）と答えているように、農民文学の確立を社会主義思想を広めるための情宣活動の一つとしてしか捉えていなかったのである。また、同じ『種蒔く人』の同人であった松本淳三は、そのプロパガンダに応じて現れるべき新文学の担い手を「苟も農民芸術の作家をもつて自ら任じ立たうとする、若い田園の青年諸君は、必ず勇敢にして素朴、真面目な、しかも無学な（敢て無学を要求する）、その上決して文壇意識にその魔を迷はさない、農民の中の農民でなければいけない」（「擡頭期にある農民芸術に就て」『種蒔く人』一九二二年十一月）と規定していた。これら小牧や松本の考えの底にあるのは、農民文学を既存文学への対抗手段として成型する戦略、そして、それをプロレタリア文学の一翼として組織する知識人の優位性である。

このように対象化される農民文学および農民の概念を、組織される側にいた農民たちは黙然と受け入れるわけにはいかないだろう。特に犬田のように成績優秀でありながら農民に学は不要とされ中学校進学を諦めた者[5]にとっては、敢えて無学を要求されることなど屈辱であったはずだ。手段としての農民文学、そして、後衛としての農民の位置に甘んじることはできない。だが、当初犬田は、小牧や松本のような考えに対して明確に反旗を翻すことはしなかった。なぜなら、そうした齟齬は乗り越えられると考えていたからだ。犬田は、次のように述べている。

私は土の芸術をもつて、都会文芸に対する田野の文芸、町人文芸に対する百姓の文芸といつたやうな、対立的なものだと思つてゐない。否、実際に、さうあつてはならないし、またさうあるべき筈もないのである。土の芸術は、対立的の境地を越えて、それ自身が全部をなすものである。／つまり言葉をかへて云ふならば、土の芸術は、土に生きるものゝ当然持つべき芸術であると同時に、それは社会全般に向つてのものでなくてはならぬ。

（「土の意識と土の芸術」『早稲田文学』一九二四年三月）

ここで犬田は、「単に常識的に、世間一般に解釈されてゐるやうな都会芸術、町人芸術に対立するところの郷土芸術、乃至農民芸術といふものと混同されたくないため」（「再び土の芸術の意義を説く」『早稲田文学』一九二四年八月）に、〝土の芸術〟という用語を使って所謂農民文学と概念を区別しようとする。対抗的なものとしてではなく、対立を揚棄するものとして措定される土の芸術は、「社会革命の中でも最も至難な農民の、内からの革命、内から自覚（ママ）を主要目的として進むもの」（「「大地主義」に対する疑問」『早稲田文学』一九二四年十月）と概念化されるものであった。そして、この土の芸術は、「農村を根本的に新らしく創り出すところの原動力を供給するものでなければならぬ。あくまでも内面的に、精神的に、そして血となり肉となつて彼等を燃え立たしめるものでなくてはならぬ」（「農村問題と土の芸術」『早稲田文学』一九二三年一月）と考えられ

た。また、犬田は、農民解放および農民文学の運動がこの土の芸術によって力を与えられ、進むべき方向を指示されると考える。「土の芸術――すべての芸術が、運動の手段でないことは明白だ。運動の手段でなく、それは運動が却つて芸術の手段であることさへあり得る。運動は文芸によつて力を与へられ、本来の方向を指示される」（同前）。では、犬田が企図する土の芸術としての農民文学が進むべき先は何か。犬田は、「プロレタリヤ文芸も土の文芸も、今のところ、汎プロレタリヤ文芸――未来社会、新人生に於ける新文芸の一分派、そこに到るべき二つの道程に過ぎない」（「土の芸術の運動と其精神」『新小説』一九二六年四月）と考えた。そして、「土の文学と所謂プロレタリヤ文学とは、発足点の差異で、無産大衆の社会に於ては、当然融合すべきものではないか。（私はさう観る）」（「諸家の農民文芸論を評す」『文芸戦線』一九二六年八月）と述べるように、土の芸術を基軸とする農民文学運動が将来的には無産階級解放という一つの目的を共有することでプロレタリア文学運動そのものに発展してゆくべきだと主張するのである。和田傳も同様に「現代の農民文学は、広い、そして大体的な言葉の意味では、プロレタリヤ文学であると解釈してもまづ憚らない」（「長塚節の「土」に就て二三」『早稲田文学』一九二六年八月）と述べているように、当時、土の芸術（農民文学）はプロレタリア文学と一体化し、プロレタリア文学そのものに転化すると捉えられていたのである。

このことは、運動組織の側面からも傍証される。一九二五年十二月、日本で最初のプロレタリア文学運動組織として結成された日本プロレタリア文芸連盟に、犬田は青野季吉や林房雄とともに発起人の一人として参加している[6]。また一九二八年三月、プロレタリア文学運動の統一戦線を目指して結成された日本左翼文芸家総連合に、犬田が中心となって組織した農民文芸会が参加していることからも、犬田たちがこの時期、共同戦線を模索し、プロレタリア文学運動に資する農民文学の展開を企図していたことがわかる。

しかし、プロレタリア文学運動が統一戦線へ向かう道行きは、プロレタリア文学のマルクス主義化の過程でもあった。日本左翼文芸家総連合結成の呼び水となった蔵原惟人の「無産階級芸術運動の新段階」（『前衛』一九二八年一月）は、「マルクス主義的芸術理論を展開することによつて、それ（引用者注―ブルジョア芸術理論）を徹底的に克服しなければならない」と述べ、マルクス主義芸術を担う「全左翼芸術家団体統一連合の組織」の確立を提起する。そして、この組織化は「小ブルジョア芸術家、農民芸術家に影響して、之を左翼化せしめること」を可能にすると意義付けた。

こうした情勢の中で、犬田はマルクス主義に基づくプロレタリア文学・農民文学に対して異議を唱えてゆく。なぜなら、マルクス主義には看過し得ない権力構造が存在すると考えられるからだ。犬田は次のように述べている。

> 共同戦線が絶対に不可能だとは私は云はない。云つたこともない。それが不可能なのは、マルクス主義に立脚して、即ち中央集権主義、乃至都市産業主義に立脚して云はれる場合には、そこに許すべからざるペテンがあると云ふのである。また云つたのである。／そのペテンと云ふのは、器械生産に支配せられる有機生産、商工業に支配せられる農業――さうした倒逆関係である。云ひかへればさうして共同戦線を張つて資本主義を止揚してしまつたと仮定しても、そこに出来た新社会に於ては、依然として農生産乃至それに従事する者は下積みであり、搾取の対象でしか有り得ないといふことなのである。
> （「最近の問題」『農民』一九二七年十一月）

犬田の考えでは、非生産者である都市と生産者である農村の関係は主従関係にある。都市は周辺農村から食料は元より、あらゆる利益・生産物を収奪する場所なのである。犬田の「農村搾取の概観」（『農民』一九二八年一月）では、農業生産の全ての利益が貨幣と化し、地主や金融機関による投機、そして税金や半強制的な寄附金の形で都会へ流れ込む状況が批判されている。インフラ整備などによる農村への還元は商品の流通を通してさらに搾取を徹底させるものであり、「何れもより多く円満完全に搾取を遂げるためのもの」（同前）でしかない。非所有者という枠組みで都市労働者と農民を一括し、その階級内部の差異を問わないマルクス主義は、この非生産と生産の主従関係を認識できないと犬田は批判するのである。

ところが、共同戦線における理論的根拠としてのマルクス主義は加速度的に先鋭化してゆく。前述した日本左翼文芸家総連合の結成後に直ぐさま組織されたナップは、芸術大衆化論争を経て「芸術運動のボルシエビイキ化」（「芸術大衆化に関する決議」『戦旗』一九三〇年七月）を運動方針として掲げた。そして、運動の理論的基軸となった蔵原の「「ナップ」芸術家の新しい任務」（筆名・佐藤耕一『戦旗』一九三〇年四月）では、「戦闘的プロレタリアートが大衆闘争の先頭に立つてする×（党）の拡大・強化を中心的課題としてゐる現代の日本に於いては、プロレタリヤ作家・芸術家の全関心も亦この線にそうて進んで行かなければならない。かうして初めて我々は、漠然とした「プロレタリヤ芸術家」としてゞはなく、真実のボリシエヴイキー的××（共産）主義的芸術家となることが出来るのだ」[7]と揚言される。

ここで留意するべきことは、蔵原が述べる「戦闘的プロレタリアート」あるいは「我々」には、もはや犬田たちが含まれていないということだ。既に日本左翼文芸家総連合結成の時点において、農民芸術家は左翼化せしめられる対象であった。さらに、ナップの方針では「広汎な農民を自身の同盟者とし」（「芸術大衆化に関する決議」前掲）と述べられているように、農民階級は同伴者に位置付けられ革命主体として主体化されない。犬田たちは、非マルクス主義者として、そして農民として二重に疎外されることとなるのだ。このように「プロレタリア文学」は、党の文学、都市労働者の文学として、マルクス主義者たち少数の前衛に担われるものとして概念化される。農民および農民文学は、このプロレタリア文学を利する手段と位置付けられるのである。

プロレタリア文学の概念がマルクス主義文学として顕在化してゆくこうした状況の中で、犬田は次のように述べざるを得なかった。

> 都市プロレタリヤ文芸は、マルクス主義に堕在することによつて、完全に支配階級（未来のそれを必然として夢想する少数者）の政治的文学となつてしまつた。従つて吾々の農民文芸とは、それは氷炭相容れないものである。結局プロレタリヤ文芸は、都会文芸であり、ブルジョワ文芸の一変形に過ぎなかつたことを曝露してしまつた。で、真の無産大衆――生産階級の文芸は、吾々の農民文芸であると云はなくてはならないことゝなつたのだ。
>
> （『農民文芸三講』全国農民芸術聯盟出版部　一九三〇年）

農民文学運動の最初期に示された農民に対する下向きの眼差しと組織する者の優位性は、マルクス主義を志向したプロレタリア文学の理論と概念の中へ持ち越されることとなった。そして、そのことが、犬田の夢見た共同戦線の実現を頓挫させることとなったのだ。しかし、犬田とプロレタリア文学運動およびマルクス主義との関係は、ここで途切れることはなかった。両者は、この後さらに激しい論争を繰り広げることにな

るのである。

三　共同戦線の組織と抵抗

一九三〇年十一月、ウクライナ共和国のハリコフにおいて行われた第二回国際革命作家会議（ハリコフ会議）は、日本のプロレタリア文学運動に大きな転機をもたらした。ナップに対立していた『文芸戦線』グループ（＝労農芸術家連盟）は反革命的な社会民主主義団体の代名詞として認知されることとなり、日本のプロレタリア芸術運動の正統をナップが担うことに国際的な権威が付与されたのである。その結果、「日本の文学運動はプロレタリア作家同盟を通じて進められるべきであるということが明確にされ」（宮本顕治「座談会　プロレタリア文学運動の再検討」『近代文学』一九五四年二月）、労農派への徹底的な排撃が行われた。そして、激しさを増したプロレタリア文学運動内の内部対立は、人民戦線の不成立に結びついてゆくことになるのである。[8] だが、ナップが排除したのは労農派だけではない。犬田たち『農民』派の運動もまた、ハリコフ会議の決定によって運動主体から疎外されてゆくのである。

犬田たちの農民文学運動に決定的な影響を及ぼしたのは、ハリコフ会議で決議された日本プロレタリア作家同盟に対する次のような指令である。

> 国内に大きな農民層を持つ日本にあつては、農民文学に対するプロレタリアートの影響を深化する運動が一層注意される必要がある。日本プロレタリア作家同盟の内部に、農民文学研究会が特設されなければならぬ。しかし言ふまでもなく、それがあくまでもプロレタリアートのヘゲモニーの下に置かれなければならぬことは、勿論である。
>
> （「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議」『ナップ』一九三一年二月）

これを受けて、作家同盟内部には直ぐさま農民文学研究会が設置される。そして、作家同盟は、ハリコフ会議の決定に忠実な農民文学の創造を目指すことになるのである。例えば、池田寿夫は、「農民の闘争を農民だけの闘争としてでなく、都市プロレタリアートの指導の下に、それとの強固な政治的結合をもつて、土地××を遂行しなければならぬことをアヂ・プロすることが重要なのである」（「農民とプロレタリア文学」『ナップ』一九三一年二月）と、作家同盟による農民文学創作の方向性を規定する。加えて、「農民を対象とする吾々プロレタリア文学の主要なる力点は単に農民生活の挿話的展開でもなければ、悲劇的構成でもなく広汎なる階級闘争の図式を定式化する中に、都市労働者の強固なる結合なくしては、農民の勝利も解放もあり得ないと云ふ、マルクス主義的イデオロギーの強化である」（池田寿夫「農民文学の新しき転向」『ナップ』一九三一年三月）と、農民文学の起点をあくまでもマルクス主義に基づく階級闘争思想に置くことが強調された。つまり、作家同盟の理解において農民文学とは、小林多喜二が言うように「それはあくまでも、プロレタリアートの観点から農民を取扱つた作品といふ意味であつて、プロレタリア文学以外の何ものでもないのだ。たゞ、都市のプロレタリアートを取扱ふ作品に対して、便宜上農民文学と云つてゐるに過ぎない」（「文芸時評」『中央公論』一九三一年五月）と考えられたのである。同様に黒島伝治も、農民文学を指して「プロレタリア文学内の一ツの分野であつて、プロレタリア文学に包括されるところのもの」（「農民文学の正しき進展のために【中】」『読売新聞』一九三一年六月五日　朝刊）と述べている。今度は犬田ではなく作家

同盟側が、農民文学をプロレタリア文学そのものとして捕捉したのである。

とは言え、農民文学をプロレタリア文学に内包されるものと考える認識は、前述した犬田の意図とは全くかけ離れたものであった。ヘゲモニーの掌握を主目的とする作家同盟にとって、農民文学論は「農民作家の、プロレタリアートの側への獲得の問題」（壺井繁治「農民文学への新たなる関心【一】」『東京朝日新聞』一九三一年七月十日　朝刊）以外の何ものでもなかったのである。

このような農民文学の規定に対して、犬田は激怒する。犬田の眼には作家同盟の農民文学は、「都市プロへの隷属を農民へ強要するところの強権文学であり、農民層獲得のための政策的文芸であつて、農民それ自身の立場より生起する文学ではない」（「何のための農民文学?」『読売新聞』一九三一年四月二三日　朝刊）と受け取られた。それは、「実に農民階層を馬鹿にしきつた、少しも理解のない、思ひ上つた態度」（「『農民文学』とは何ぞ?【上】」『読売新聞』一九三一年六月一日　朝刊）であり、到底容認できるものではなかったのである。犬田は次のようにも述べ、マルクス主義者たちを激烈に非難する。

> われ〳〵の農民文芸は、農民を獲得なんかしようともせず、ボル化しようと努力しもしない。そんなことはてんで問題をなさない。／われ〳〵の農民文芸は、農民それ自身の中から生れる。そこには獲得も何々化もあり得る筈がない。（中略）マルクス主義の農民文芸は政略上、便宜上の農民文芸――然も単に題材を農村に求めるだけの都市プロレタリヤ文学の変形であり、変態である。
> （筆名・茨木隆「何をか農民文学と言ふ?」『農民』一九三一年六月）

犬田の農民文学論・プロレタリア文学批判の核心が、マルクス主義の組織論に対する怒りであることがここで鮮明になるだろう。マルクス主義者たちが当然のようにプロレタリア文学運動のヘゲモニーを握り、自分たち農民を組織化の対象として矮小化し都市プロレタリアートの指導を待つだけの存在として貶めることは、犬田にとって許し難い暴挙として捉えられたのだ。当事者である現実の農民の姿を等閑視するマルクス主義の強権的な組織論に対して、犬田は「日本の農民は、マルクス主義者（都市プロに非ず！）に指導なんかされなくたつて、ちゃんと、立派に運動して行ける」（「盲信を棄てよ」『帝国大学新聞』一九三一年七月十三日）と反撥せずにはいられなかったのである。[9]

だが、犬田の批判をよそに、作家同盟の農民文学論はさらに急進的に、そして観念的になってゆく。例えば、蔵原惟人は、犬田たちが主張する農民による農民文学は「まだそれ自身ではプロレタリア文学ではない。それをそう呼ぶことは、たゞ理論的にのみではなく、また政治的に誤謬である」（筆名・柴田和雄「農民文学の正しき理解のために」『ナップ』一九三一年七月）と述べる。先の小林多喜二や黒島伝治の考えから農民文学の概念が更新され、農民によって創作された農民文学はプロレタリア文学ではないと言明されるのである。[10] なぜなら、「農民の大部分は小所有者であり、小ブルジョアである。従つて彼等は、資本主義との決定的闘争に於いて動揺する可能性をもつてゐる」（同前）からだ。[11] つまり蔵原に拠れば、現下の状況において、一般の農民および農民作家はプチブルであり、プロレタリアートたる資格がないというのである。ゆえに、農民作家・農民文学を組織するために、「プロレタリアートの同盟者としての農民文学の狭隘性を批判し、それらが真にプロレタリアートの科学的見地にたかまり得るやうに導くことは、プロレタリア文学の任務である」（宮本顕治「農民文学論の発展」『東京日日新聞』一九三一年七月三日　朝刊）と考えられ

たのだ。

こうした急進的な階級闘争思想・組織論に、犬田は決して屈服しなかった。犬田は、「われ〳〵の文学は、プロレタリア農民文学の如く、農民層獲得などといふ、農民階層にとつて余り有りがたくもない「目的意識」を持つ必要はがうもないのだ。／彼等の文学は、彼等が何と抗弁しようとも、上から下へおつ被せる文学だ。われ〳〵のそれはあくまでも、文字通り、下から上へ噴出する文学だ」（「血迷へる彼等」『東京朝日新聞』一九三一年六月二日　朝刊）と、自分たちの農民文学と作家同盟のそれとの決定的な差異を強調し続けてゆくのである。

二度に渡る農民文学論争を経てなお、農民文学運動の原点に示された考え方、即ち中央集権に進むべき過程の暫定的・戦略的な地方主義という認識から、マルクス主義者の農民・農民文学理解は微動だにしなかったと言える。犬田の他にも声を上げた農民作家たちからの幾多の批判、例えば作家同盟の農民文学を指して「それは、彼等プロレタリア文学が農民層を彼等の階層の利用の為に獲得せんとする文学であつて、決して、それは農民階層からの、――農民の自覚によつた、農民それ自身の階層に於ける解放の為に出発した文学でない」（寺神戸誠一「農民からの農民文学へ」『読売新聞』一九三一年九月十日　朝刊）という声にマルクス主義者たちは耳を傾けず、農民を「目的」ではなく「手段」として扱い続けたのである。

以上に概観した農民文学を巡るマルクス主義と犬田たちの軋轢は、その後も揚棄されることはなかった。等しくプロレタリア文学の確立を企図し、社会革命を目指した両者の共同戦線は遂に成立することがなかったのである。

四　組織論としての農民主義

マルクス主義に徹底抗戦し、その組織論に屈しなかった犬田たち『農民』派は、もはや自分たちの文学をプロレタリア文学と名乗ることはなかった。そして、マルクス主義文学とは差異化された独自の農民文学・革命文学運動を組織してゆこうとしたのである。

しかし、犬田たちには、そもそも文学運動を推進する明確な組織論がなかった。犬田は、「発生当初より最近に至るまで、約十年間、農民文芸理論は区々として統一がなかつた。この統一性といふ方面から観察するならば、遙かに一母体――社会関係より発生したマルクス主義芸術理論に、吾々は一歩を譲らなければならない」（「農民文芸理論の清算より確立へ（上）」『農民』一九二九年八月）と述べている。ゆえに、犬田は、「無産農民それ自身のイデオロギーに立脚してゐたものならば、そこに何等かの統一がなければならなかつたのではないか」（同前）と組織的な文芸理論の確立を求め、自ら先頭に立って理論構築に邁進したのである。では、犬田はどのような組織論・文学運動論を企図したのか。

犬田の組織論・文学理論が依拠するのは、〝農民イデオロギー〟である。犬田に拠れば、無産農民階級を糾合する農民イデオロギーとは「マルクス主義者が都市プロレタリヤの頭上へ天降らせたマルクス的イデオロギーでは勿論あり得ないし、さうかといつて旧式のアナキズムでもない。どちらかと云へば、それは既成のものではなく、これから成立しようとし、現に成立しつゝあるもの」（「農民文芸理論の清算より確立へ（下）」『農民』一九二九年九月）である。犬田は、マルクス主義でもなければアナーキズムでもない第三の道として農民イデオロギーの形成を構想し、それを運動組織の統一理論に据えてゆこうとするのである。そして、「作者の態度が農民イデオロギーにある限り、その文学は、農民を描かうが、

都市の小ブル、大ブル乃至貴族を描かうが、それは厳然として「農民文学」だ」（「彼等の蒙を啓く」『東京朝日新聞』一九三一年六月四日　朝刊）と考えられた。

この農民イデオロギーは、さらに相互扶助に基づく自治の意識として概念化される。犬田は、「農民のイデオロギーは、政治ではない。断然として自治だ。／政治には強権（暴力）、支配、抑圧は、当然の付属物である。自治にあつては、さうした色彩は絶無だ。あくまでも相互扶助的自己統制による全社会の統制である」（「血迷へる彼等」前掲）と記している。そして、この自治社会実現を担う革命階級こそが農民であると位置付けられるのである。

ここで農民の存在が前景化されるのは、「現代社会に於て最後の被圧迫・被搾取階級」（「自治社会と農民文学」『新潮』一九三二年六月）である農民の地位を社会全体へ拡大することによって「社会は無搾取無支配に生きることが単純ながら可能」（同前）になると考えられたからだ。ただしこれは、社会構成員の全てが農民になるということではなく、第五階級として都市プロレタリアよりもさらに下層に位置付けられる農民が抑圧と搾取のない社会関係に生きていくことを可能にすることによって、社会全体の抑圧と搾取を解消しようとするものである。つまり、農民の社会関係は、社会全体の抑圧・搾取機構の存否を確認する表徴と考えられたのである。

このような相互扶助的自治意識としての農民イデオロギーを基軸とする農民主義こそが犬田の構想した組織論の理論的基軸を成すものであり、「農村に於ては、吾々の農民主義（農民自治主義）のみが真に適用され、またそれのみがマルクスの誤謬を正し、止揚し、そして新社会の基礎理論をなす」（「農民文芸運動の現状」前掲）と位置付けられた。そして、「吾々の農民文学は、以上のやうな自治社会建設の基本階級としての農民のイデオロギー表現の文学」（「自治社会と農民文学」前掲）と規定されたのである。これら、農民主義に基づく組織論と文学論は、「二つにして一である。たゞ、文芸を主にして論ずる時は文芸理論となり、実際運動を主にして論ずる時は自治主義の理論となる」（「農民文芸運動の現状」前掲）ものであった。

ところで、この農民主義はどのように組織化を実践するのだろうか。その組織化の過程では、「自治社会建設は、全社会の各員がそれ〴〵その能力に応じ自分自身の周囲から、一斉にそれへの組織に進めばいゝ」（「農民自治の話（六）」『農民』一九三一年二月）と自由な参加が求められた。同じことは文学運動にも適用される。犬田は、「農民文芸の運動にあつては、運動主体は、各地方々々に、最初はぽつ〳〵と、次第に濃密に、大地から生え抜いて来る。断じてそこへ移植されるのではない。そしてそれらの主体は、その地方の情勢に応じて自由に行動する。中央の指令など、云ふ厄介な荷物は背負つてゐない」（「農民文芸運動の現状」前掲）と述べている。

けれども、オプティミズムに貫かれた犬田の理論構築は、当時、中野重治によって「「農民主義」者が、その「自治」や「相互統制」やをいかにして実現するのか教へない以上彼らと一しよに踊ることは出来ない」（「農民文学の問題」『改造』一九三一年七月）と、その内容の曖昧さが批判されていた。また、先行研究においても、「犬田卯らの「農民」派の人たちの拠って立つ「農民イデオロギー」というものはきわめて未熟なものであり、「農工合致の自治社会」の建設を目指すという文学運動がこれまた具体性に欠けた現実性の薄い非科学的なものであるという指摘は、この面だけを取り上げれば確かに正しいものであり、それに故にこの論争は作家同盟側が圧倒的に勝利した」（南雲道雄『現代文学の底流』オリジン出版センター　一九八三年）と評価されている。では、犬田の議論には省み

るべき点がないのかと言えば、そうではない。犬田の独創的な文学論・組織論をマルクス主義へのアンチテーゼとして把握することで、プロレタリア文学運動に内在した問題点がより鮮明に顕在化すると考えられるのである。

例えば、犬田の組織論を前提とすれば、そこに「芸術大衆化に関する決議」やハリコフ会議の決定で提起された大衆化やヘゲモニーの問題は起こりようがない。相互統制による自治組織は自発的・自律的なものとして秩序形成を行うはずである。明確な組織論を持たず十年近くも活動を続けてきた犬田たち『農民』派の実践はその証左となるだろう。逆に言えば、マルクス主義において大衆化やヘゲモニーの問題が浮上することそれ自体が、看過できない深刻な問題を表示している言うべきである。犬田は、そのことを次のように指摘している。

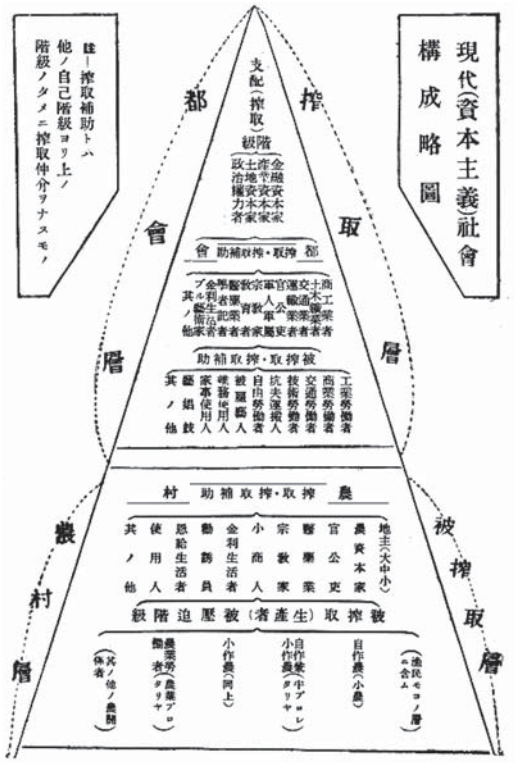
若しマルクス主義文学が、本当に労働階級から生れて来るものなら、何も「大衆化」の必要もなければ、作家の工場街移住など、問題ではない筈だ。／それが問題になるのは、その文学なり、作家なりが——否、実際はイデオロギーまでが、労働者以外のものだからだ。言葉をかへて云へば、労働階級を利用し、踏台にして事を成さうとする政治家、それに追□する思想家・芸術家の自己矛盾の曝露だ。（中略）自分達が新たなる支配階級たらんとするの野心から、他へおしつけ、おつかぶせる目的の下に制作された文学など、最初からいゝものである筈はないのだ。

（「『農民文学』とは何ぞ？【下】」『読売新聞』一九三一年六月三日　朝刊
□は判読不可文字）

犬田の考えでは、マルクス主義に依拠したプロレタリア文学運動の担い手は労働者ではなく、それが目的とするのは権力奪取によって少数前衛が支配階級として君臨することである。こうした運動主体と目的の錯誤ゆえに、マルクス主義は大衆化やヘゲモニーを必要とするのだ。犬田にとってこれらは、プロレタリア文学の存在意義自体を消失させる致命的な矛盾であった。そして、この矛盾こそが、農民文学論争を引き起こした最大の原因だったのである。

マルクス主義に対峙する犬田の組織論・文学論が問い続けたのは、プロレタリア文学運動の担い手は誰なのかということ、そして、それが目的としているのは何なのかという原理的な問題である。農民文学論争を通して、犬田が当事者性について執拗に拘り続けてきたのはこれまで見てきた通りである。犬田の文学論には「必要なことはたゞ一つである。即ち表現される事——百姓が表現を持つこと——この一事である。／これまで百姓は表現を持たなかつた。（中略）百姓に生れた運命を呪つたり、何時も暗い顔をしてあらぬ方を見守つて嘆いてゐる代りに、光明と希望に息づく事、これは表現を持つといふたゞの一事で、解決せられるのである」（「農人と文芸」『農民文芸の研究』春陽堂　一九二六年）という考えが基底にあった。自己を解放するのは自らの身体・生活から沸き立つ具体的な表現であるという犬田の信念は、「芸術大衆化の唯一の目的は、広汎な労働者及び農民大衆の中に、この革命的イデオロギー（引用者注—プロレタリアートの××（独裁）を目標として進みつゝある日本の××（革命）的プロレタリアートのイデオロギー）を浸透せしめることに外ならない」[12]（「芸術大衆化に関する決議」前掲）と言って憚らないマルクス主義の組織論・文学論からは欠落していたものだ。犬田は、「文学は「生れる」ものである。作家も同じ。断じて！」（「『農民文学』とは何ぞ？【下】」前掲）とも述べている。労働者・農民を解放する文学は、決して非労働者が案出した理論によって生み出されるものではないのだ。

また、ヘゲモニーの問題に関しても、犬田はマルクス主義とは全く異なる権力の在り方を構想する。犬田は現代社会の構成を図のように認識しており、「政治社会の形態はピラミッド組織である。権力のピラミッド、生活関係のピラミッド、従つて中央集権！　／支配機関がみな中央に――ピラミッドの頂点に集つてゐる。そしてその中央で「決定」されたことが各地方々々にそれ〴〵の機関を通して伝達される」（「農民自治の話（二）」『農民』一九三〇年十月）と述べる。この政治による支配は、「被支配被搾取階級を愚鈍化し無力化し去勢することによつて上下の整然たる統制を保持しようとする」（「自治社会と農民文学」前掲）ものだ。マルクス主義は、このヒエラルキーの頂点を目指す運動であり、権力の奪取と政治による支配を志向する以上、権力の構造それ自体を解消することはない。権力が権力である限り、その維持再生産とそれに伴う抑圧は必然であると犬田は考えるのだ。農民を第五階級に貶めるマルクス主義の理論と実践は、そのことを例証していたのである。



図：「現代（資本主義）社会構成略図」
（犬田卯「自治社会と農民文学」
『新潮』1932年6月　110頁）

対して自治社会とは「このピラミッド形を相互平行組織にしたものである」（同前）と犬田は考える。具体的には、「即ちこゝに一個の円を描けばいゝ。その中へ傘連判状式に、あらゆる社会的必要労働業務を並べるのである。（中略）而して彼等は各自の業務に従つて社会的責務を果し、即ち共働し、自治するのである」（同前）。この平行組織では、全ての人間が平等であり、権力をもって命令することはできない。「こゝではあらゆる人間が（中略）あらゆる各自の要求を提出する。そしてそれが大多数の進歩的な要求（正義）と一致した時、はじめて全般の服庸しなければならない責務となる。誰が命令するでもなければ、誰が服従するでもない。みんなが命令し、みんなが服従するのだ」（「農民自治の話（二）」前掲）。

ヘゲモニーの問題を巡る犬田とマルクス主義の考えは対照的であるだろう。マルクス主義は右記のヒエラルキーを転倒させ権力の掌握を目論むが、ヒエラルキーの構造それ自体には手を付けない。なぜなら「ブルヂョアジーの××（打倒）は、（中略）支配階級へのプロレタリアートの転化によつてのみ可能」（レーニン『国家と革命』共生閣　一九二八年　岡崎武訳）であり、そのためにプロレタリアートには、過渡期的な「国家権力、権力の中央集権的組織、一の××（暴力）の組織を必要とする」（同前）からだ。[13] これに対して犬田の組織論では、権力の無効化が織り込まれ、ヒエラルキーそれ自体の解体が企図されている。一切の権力を信じない犬田の考えは、マルクス主義が構想する階級社会および権力の構造をラディカルに突き崩すのである。

原理的な矛盾を内包したマルクス主義は、犬田たち農民の理論ではなく、また、自分たちを解放するものではなかった。プロレタリアの解放を謳いながらプロレタリアである自分たちを抑圧支配する矛盾を、犬田は見過ごすわけにはいかなかったのである。そうした矛盾に対する怒りが、犬田に独自の組織論・文学論を構築させる契機となったのだ。プロ

レタリア解放の運動を誰が担うのか、解放を目的としてなぜヘゲモニーや支配が必要なのか、そして、どのような未来社会を構想するのか、犬田はマルクス主義そのものの蹉跌を同時代において撓むことなく問い続けたのである。

五　〝犬田卯〟という矛盾

以上のように本稿は、犬田卯の農民文学論・組織論が惹起するマルクス主義とプロレタリア文学運動の問題を検討してきた。そこでは、マルクス主義への批判者としてその威力に決して屈することのなかった農民文学者の思想と実践、およびマルクス主義文学運動に内包された諸矛盾が看取された。もちろん、犬田の考えには天皇制の問題が一切考慮されていないなどの瑕疵はある。だが、犬田の自治社会論が描いた理想社会を幻想と言うのなら、日本のマルクス主義が展開した史的唯物論も同じく幻想でしかないものであっただろう。重要なことは両者の優劣や現実性ではなく、両者が往時において同時代的に存在していたことをどのように考えるべきかということである。両者が共時的にそれぞれの文学論・運動論を展開したことは、両者の対立とともに、両者が相互補完的な関係にあったことも示唆していると思われるのだ。そのことは、例えば次のように考えることができる。

本稿がこれまで記述してきたように、犬田の理論とマルクス主義は相容れないものとして乖離していった。しかし、農民文学運動が生起した時、ともにプロレタリア文学の確立を目指していたように、犬田とマルクス主義の両者は、究極の目標を実は最後まで一致させていたのである。具体的には、犬田の組織論において、自由で平等な複数の平行的組織が後に一個の自由連合体を形成すると理論付けられていたことが挙げられる。犬田は、歴史的・地理的に緊密に結びつく「相互扶助的な條件をより多くもつてゐる村なり、部落なりが、一個の自治連合体の単位」（「農民自治の話（二）」前掲）となり、そして、「それがお互ひに平面的に一つ〳〵結びついて行つて、群連合、県連合、国連合、世界連合（中略）といふ風に次第に大きくなる」（同前）と考えていた。この時、拡大する自治連合は、マルクス主義における最大の障壁であった国家をも解体する。

> 単位自治体は一個の生きた共働・共産体だ。全社会の細胞だ。つまりそれ一個としても生きられないことはないが全聯合が一体となる時、もつとも完全に生き得るところの全共産体の一部分である。／かうした自由連合体が世界連合体として全地上を覆ふ。そこにはもはや国境もなければ城壁もない。（同前）

犬田の企図していることが共産主義であることは明白である。同じコミュニズムを志向しながら、犬田とマルクス主義は、自治連合体の形成とプロレタリア独裁という全く異なる移行過程を理論化していたのである。これら両者の優劣を評価することは偽の問題である。革命に至る両義的な過程として、両者の考えはどちらも真であり、一方を切り捨てて済むものではないからだ。

マルクス主義はプロレタリア独裁による国家権力の掌握によってのみ共産主義へ漸進する社会主義革命が可能であると考えていたが、この命題の正しさはロシア革命の成功という歴史的事実によって担保されていた。[14] 一方、力による国家権力の奪取は単なるヒエラルキーの転倒に過ぎず、構造化された搾取や抑圧を解消しないという犬田の判断も歴史によって証明されていたはずだ。犬田は「たとへばロシヤに見るが如く、或は伊太利に見るが如く、それは単に支配の交代にしか過ぎない。下層

生産階級――殊に最下層のそれ――農民階級に至つては、旧態依然として被搾取被支配のくびきの下に泣き喘がねばならないことは、すでに我々の見たところである」（「農民自治論（承前）」『農民』一九三二年十二月）と述べている。犬田の考えでは、国家という中央集権的な政治機構が社会に温存される限り、支配と被支配の構造は解体されない。ゆえに、プロレタリア独裁に対する対案として、中央集権体制を打破する相互扶助的な自治組織の連合を提示したのである。

犬田とマルクス主義の両者は同一の目標を共有しながら各々を対立的なものとして認識していたが、しかし、右記のように、双方の考えは互いに批判対象である相手の認識に制約されているとも考えることができる。換言すれば、犬田の考えはマルクス主義理論を補正する反措定であり、その逆もまた然りであると位置付けられるのだ。

犬田とマルクス主義という両極の一方に立てば、もう片方は矛盾として現象するだろう。だがこの矛盾は、弁証法的思惟によって自らの理論的強度を保持してきた双方にとって必要不可欠なものだったはずである。犬田の自治社会論とマルクス主義の矛盾は、コミュニズムという目標へ至る過程で揚棄されたかも知れないプロレタリア文学思想の臨界を想像させるのである。そして、こうした矛盾あるいは相互補完的位相を開示することは、「プロレタリア」文学運動とは何であったのかを問い直すために必須のプロセスであると本稿は考える。

犬田のような批判者の存在を特権化しマルクス主義の誤謬を言挙げするだけでは、マルクス主義思想がプロレタリア文学運動に与えた意義を見失う。革命の夢を現実のものとし、世界を認識する理論的枠組みを労働者に提示したマルクス主義を犬田のように単純に否定することなどできない。一方、マルクス主義の無謬性を疑問に付さなければ、当時の運動論に孕まれた躓きを看取できない。犬田のような批判者が現れざるを得なかった原因、およびマルクス主義がその理論的整合性を超えた別種の強度を持ったことが理解できないのである。即ち、プロレタリア文学が運動化されてゆく過程でマルクス主義がどのようなインパクトを持ったのかを理解するためには犬田のような批判者の存在を同時に読み込まねばならず、また、犬田が提示した独自の文学論・組織論のアクチュアリティーを認識するためには同時代において拮抗関係にあったマルクス主義理論の強度を読み込まねばならないのである。プロレタリア文学運動が目的とした「プロレタリア」の具体的な姿は、こうした矛盾の渦中において立ち現れてくるはずである。

注

① 農民文学論争を検証する中で犬田たち『農民』派の文学運動に〝弱さ〟を看取する批評は、これまでに幾度も反復されている。例えば、高橋春雄は『農民』派の性格について「その発想はまさしく空想的である。主情的、直感的で、その周辺には一種の人道主義や精神主義がまつわり易いところのあいまいさを伴っていた」（「農民文学論史ノート」『日本文学研究資料叢書 プロレタリア文学』有精堂 一九七一年）と述べ、津田孝は「犬田卯の作品と思想は、小作農の立場を中心に、地主制度や都市の資本主義制度に対する強い反抗心をもって農村の現実をリアルにとらえながらも、苛酷なその現実をどう打開するかというたたかいの展望を示し得なかった」（「解説」『日本プロレタリア文学集・12』新日本出版社 一九八六年）と述べている。これに対して、犬田の思想を実証的に跡付け「身体的な生活感覚や生活実感から「土の芸術」を形成し、それを基軸として現下の社会を批判していく姿勢にこそ犬田の思想的意義を認めるべき」と指摘する舩戸修一「農民文学とその社会構想」（『村落社会研究』二〇〇四年三月）は、犬田の言明に垣間見られる農本主義思想の強度について言及した優れた先行論として挙げられる。犬田に関する先行研究としては他に、安藤義道『犬田卯の思想と文学』（筑波書林一九七九年）、小林千枝子「農民自治会の教師像および教育内容論の研究 その1～3」（『四国女子大学紀要』

一九八五年十二月～一九八六年十二月）、横手一彦「犬田卯年譜」（『農民文学』一九八七年二月）、同「犬田卯の文学的資質形成についての考察」（『農民文学』一九八七年八月）、同「文学への端初（ママ）」（『農民文学』一九八八年二月）を参照した。

② 昭和期以降、ナップと労農芸術家連盟が対立していたように「マルクス主義」が指示する概念も一様ではないが、本稿ではその偏差を問わない。後述するように、犬田は「マルクス主義」を主にボルシェビズムあるいはレーニン主義の意義で把握しており、本稿で使用する語義もこれに準拠するものとした。

③ 小田切のこの論文は、本多秋五が「『ナップ芸術家の新しい任務』（昭和五年）以来、近代民主主義文学建設の協力者ないし協力可能者たちの眼前に、ふつて湧いたごとく立ちふさがつたガラスの障壁を見事にうち砕いた」（「文芸時評　下」『東京新聞』一九五三年十一月二日）と評したように、その後のプロレタリア文学研究において、所謂〝ナップの眼鏡〟を外すよう示唆した画期的なものとして位置付けられている。後に小田切が犬田の遺稿である『日本農民文学史』を出版するために奔走したことは、ナップの眼鏡を外す実践であったと考えられるだろう。しかし、小田切は、その解説である「日本農民文学史の展望」（犬田卯著・小田切秀雄編『日本農民文学史』農山漁村文化協会　一九五八年）の中で、「農民文学の問題は日本近代文学そのものの問題であり、またプロレタリア文学そのものの問題でもあった」と記す一方、犬田たちに対する「ナップがわからの批判には、批判それ自体としては当っていることが多かった」と書かずにはいられないディレンマに陥っている。このことは、小田切の「プロレタリア文学」の概念が依然としてナップの文学として捉えられていることを忖度させる。

④ 犬田卯著・小田切秀雄編『日本農民文学史』（農山漁村文化協会　一九五八年）を参照。

⑤ 横手一彦「犬田卯年譜」（前掲）、同「犬田卯の文学的資質形成についての考察」（前掲）を参照。

⑥ 犬田卯著・小田切秀雄編『日本農民文学史』（前掲）を参照。

⑦ 伏せ字の復元は、『蔵原惟人評論集　第二巻　芸術論Ⅱ』（新日本出版社一九六七年）に拠った。

⑧ ハリコフ会議と人民戦線の問題については、勝本清一郎・平野謙「対談ハリコフ会議のころ」（『文学』一九六四年四月）および、中川成美「ハリコフ会議経緯」（『日本近代文学』一九八一年九月）を参照。

⑨ 農民文学論争の渦中において、マルクス主義の公式主義、また国外で議論された理論の機械的適用に対して批判を呈したのは犬田だけではない。例えば、青野季吉は「全体としては犬田の農民文学論は、まつたく問題にならないが、部分的にはたゞ一つ、そこに「小さな批判」がある。それはオツチヨコチヨイの学生・インテリ・マルクシストにたいする、嫌悪の言葉が示唆するものである。農民文学の問題と実践は、例の「産業別文学」「レポート文学」並に、お手軽に料理されては、実際たまつたものでない。犬田のずゐぶん訳（ママ）のわけ（ママ）の分らない議論にも、これだけの間違つてゐない「批判」はあるのだ」（「文芸時評」『改造』一九三一年八月）と述べており、前田河広一郎も「私達は、当然の憤慨として、何もハリコフまで行つて日本の農民を再発見させられるには当らないと云ふ。そして、云ふと共に、そのことが日本のプロレタリア文学運動の弱みであることに気づかざるを得ない」（「国際マインドの方向【2】」『読売新聞』一九三二年一月十二日　朝刊）と述べている。

⑩ 林淑美は、「「開墾」未完について」（『日本近代文学』一九七七年十月）の中で、農民文学の規定が更改された背景に「日本共産党政治テーゼ草案」に基づく日本の革命戦略そのものの変更があったことを明らかにしている。

⑪ このような蔵原の考えは、「中間身分、すなわち小工業者や、小商人や、手工業者や、農民、この人々がブルジョアジーとたたかうのは、すべて中間身分としての自分の存在を没落から守るためである。したがって、彼らは革命的ではなく、保守的である。それどころか、反動的でさえある。なぜなら、彼らは歴史の車輪を逆に回そうとするのだから」（マルクス・エンゲルス「共産党宣言」『マルクス＝エンゲルス全集　第4巻』大月書店一九六〇年　村田陽一訳／大内兵衛・細川嘉六監訳）という『共産党宣言』の機械的適用であると考えられる。

⑫ 伏せ字の復元は、『日本プロレタリア文学集・別巻』（新日本出版社

一九八八年）に拠った。

⑬　伏せ字の復元は、『レーニン全集　第25巻』（大月書店　一九五七年　マルクス＝レーニン主義研究所　レーニン全集刊行委員会訳）に拠った。

⑭　ロシア革命の成功がマルクス主義理論の正しさを担保し、運動に従事する者の思想と行動を拘束したことは、例えば次のような林房雄の独白の中に示されている。「昔の社会主義者はよく獄内で改宗しました。ところが今の社会主義者は改宗しようにも改宗のしやうがありません。プロレタリアートの力が強くなり、その国家さへ出来てゐる始末なので、若し改宗したら自分の無智と浅薄を告白するだけで、一時代前のやうに「深刻な内的体験の結果」だなどゝ威張るわけには行かないのです。はなはだ悪い時代に生れ合せたといはなければなりますまい。今は改宗も出来ない時代です」（林房雄『獄中記』創元社　一九四〇年）。

［付記：資料の引用に際し、漢字は新字に改めルビ等は全て省略した。引用文中の「／」は原文での改行を示す。また、引用・参考資料名の副題は省略した。］

（本学ポストドクトラルフェロー）